

国連オンラインシンポジウム原稿

本日のシンポジウム開催に際し、米国政府はじめ関係各位のご協力に感謝いたします。

私は拉致議員連盟会長を務める衆議院議員の古屋圭司です。300名を超える超党派議員が参加する議員連盟です。

去る5月11日には、岸田総理も出席して拉致問題国民大集会を開催しました。既に一部拉致被害者が帰国してから21年の歳月が過ぎましたが、未だ新たな進展はありません。極めて残念ですが、拉致を実行した北朝鮮は異常な独裁国家です。

その北朝鮮は、国連や国際社会の警告を完全に無視してミサイルや核開発にのめり込み、人民の生命や安全は全く考えていないのです。

その結果、経済事情も食料事情も悪化の一途をたどっています。在外公館の相次ぐ閉鎖や国内での非人道的粛清が強行されているのを見ても明らかです。

その上、ロシアとは完全に握っているのが現実です。

過日プーチン大統領は24年ぶりに北朝鮮を訪問し首脳会談を行いました。このこと自体怒りを覚えますが、その内容は戦略的パートナーシップ条約を結び軍事連携の強化、国連決議を堂々と破って武器の提供を行っているのが現実です。

ロシアは武器の提供の見返りで労働力の提供を受け、食料等の見返りをしているのでしょう。

北朝鮮は、核とミサイルを実用化すれば大国である米国とも対等に渡り合えるとの一心でのめり込んでいるのが現実です。

拉致は日本だけの問題ではなく、世界14か国の国民が犠牲になっています。その中には、米国上下両院で決議された米国人のデービッド・スネドン氏も含まれています。拉致問題は遠いアジアの問題ではなく、米国の自国民もその犠牲の可能性があるということです。今日は後ほど、兄であるジェームス・スネドン氏の訴えがあると承知しています。

拉致は国家の意志により自国民を奪い取るテロであり究極の人権侵害なのです。自国民が拉致されたら軍隊を出してでも取り返せというのが米国国民の正義です。

5月には、拉致議員連盟幹部は拉致被害者家族会代表らとワシントンを訪れ、有力な上下両院議員、国務省関係者らと精力的に拉致問題での日米協力について濃密な議論を行いました。

国務省事務方のトップである国務次官、次官補、次官補代理が揃っての意見交換や、大統領補佐官を務めるNSC上級部長のラップフーパー氏は「私も2人の子供を持つ母親だが、拉致が如何に非人道的かは痛いほどよくわかる。米国政府も徹底的に協力したい。」と言明。

拉致問題解決に向けて日米連携は強固であると皮膚感覚で実感しました。

過日のG7では、北朝鮮ロシアを厳しく非難する首脳声明が採択されました。朝口が連携を強化しても世界の包囲網がある以上、限界があります。一方中国は北朝鮮が核開発をしている現実から、生かさず殺さずのスタンスは変えないでしょう。

金正恩委員長は一月に日本の能登半島で発生した地震に岸田総理閣下の宛名で異例のお見舞いメッセージを送ってきました。その後はいつものように強気の姿勢を示していますが、何かのサインかもしれません。

日本は、あらゆるチャネルを駆使してその真意を分析しつつ、金正恩委員長に拉致問題を解決することこそが北朝鮮に明るい未来をもたらすことを解らせることです。

岸田総理も「時間的制約のある拉致問題はひと時もゆるがせにできない。金正恩委員長との首脳会談実現を目指し、直轄のハイレベル協議を進めたい。」と言明しています。

米国はじめ世界各国との緊密な連携を力に、日朝が主体的に日本人拉致問題解決に向けて取り組むこと覚悟を表明して拉致議員連盟会長の挨拶とします。

(約 1500 文字)